

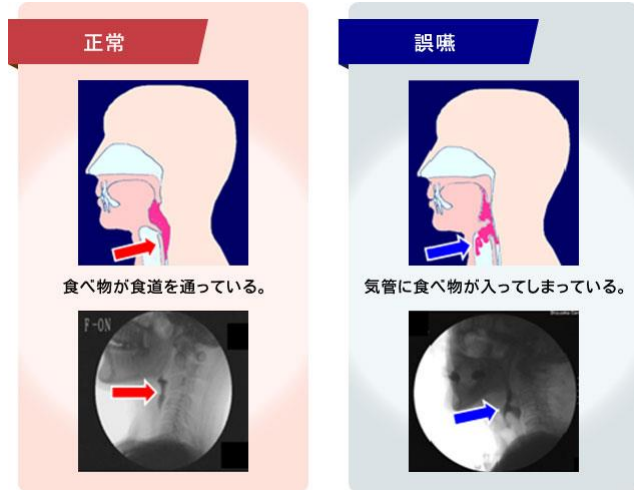
皆様いかがおすごしでしょうか。

COVID-19感染症は、皆さんの努力と忍耐に加えてワクチンの効果もあって沈静の兆しが見えてきました。一筋の光が差してきたようで気持ちが軽くなります。

さて今回は摂食嚥下外来で行っている検査についてのお話です。「飲み込み」は喉の奥で起こっていることですから、外から患者さんの喉の動きを見るなどして間接的に確かめるしかありません。それを直接目で確認する方法が二つあります。一つは嚥下造影(透視)検査(VF)でもう一つは嚥下内視鏡検査(VE)です。

1) 嚥下造影 (VF)

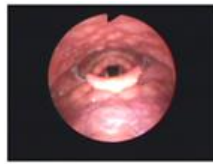
食べ物にレントゲンで黒く写る物質(造影剤)を混ぜておき、口の中から喉の奥に食べ物が動く様子をレントゲンで透視し、動画としておさめる検査です。



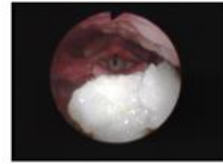
この検査は実際に食べ物が通過している様子がリアルタイムで観察される利点がありますが、実際の喉の奥の状態や、嚥下反射の強弱、微細な食物の残存などは見えないという欠点があります。

2) 嚥下内視鏡検査 (VE)

内視鏡を鼻から喉の奥に入れて、喉の奥を観察する検査です。



健康な人の喉
(中央に見える黒いものが
気管)



ご飯が流れてきている
ところ



飲み込んだ後
(ご飯が少し残っている)

この検査では嚥下の瞬間の映像が見えないという欠点がありますが、喉の奥の状態や嚥下反射の強弱、食べ物が通った後の残存などは非常によく見えます。

当院では2)のVE検査を採用し、月に平均20件ほど行っています。医師・言語聴覚士・看護師のみならず、時には歯科スタッフ・栄養士も参加して、口の中から喉の奥の様子を観察し、嚥下の状態の評価や訓練の仕方、口腔ケアのありかた、食形態の工夫などを話し合っています。時には同じ患者さんで時期をおいて2回目・3回目の検査をし、訓練の成果や見通しを話し合う事もあります。VE検査は関係者の参加を歓迎します。とても役に立つ情報が満載ですので、ぜひ摂食嚥下チーム以外のスタッフも、見学にお越し下さい！

食事は千差万別



こんにちは。蓮田病院栄養科の管理栄養士・大野と申します。今回は入院中の食事調整について紹介したいと思います。

当院には4人の管理栄養士が在籍し、患者様の食事や栄養管理を多職種チームで行っています。私たちの仕事で日々難しさを感じることにひとつに、体力を維持するための必要な栄養をいかに患者様自身が食事から摂取していただけるかが挙げられます。

高齢の患者様が多く、入院した現疾患の治療後も低栄養の状態や認知症、食欲不振、拒食など精神的心理的要因もあり十分な食事の量を摂取することができず、私たちが当たり前としている食事を摂るといふこと自体が困難な患者様が少なくないのが現状です。限られた病院の食事内容の中で嗜好に配慮し

ながら、内容を工夫・調整を行います。加えて患者様はそれぞれ摂食嚥下機能が異なるため、誤嚥性肺炎のリスクを考慮した食事内容で提供しなければなりません。

そのような状況で安全に摂食ができるように当院の食事には、6種類の加工した形態と2種類のとろみ粘度をつける形態を用意しています。

当院の管理栄養士は、患者様が今後も継続して口から食事が摂れるように適した食事形態を選択し、在宅でも同様に作れるようその調理・加工方法を患者家族様にお伝えする支援を行っています。食事に関する心配事は遠慮無くご相談ください。



栄養科
管理栄養士
大野泰行